

はじめに

この報告書は、一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究 16「human/non-human interface」(代表：安川一、久保明教)主催のもと、2018年2月3日に開催されたワークショップ「アフター・サイボーグ」の記録を収録したものである。本編に入る前に、ワークショップが開催されるに至った経緯について説明したい。

2016年度に始まった先端課題研究 16「human/non-human interface」は、人間と非人間の様々な接合面に注目し、人類学、社会学を超え、情報・ロボット工学、美術、霊長類学などを含む多様な領域から実践的かつ批判的な研究を目指してきた。毎月行われるセッションには、2018年度までに二十名の研究者やアーティストを講師として招き、一橋大学社会学研究科の大学院生と教員、時には学外からの聴講者を交えて、活発な議論を行ってきた。専門分野の異なる多様な講師陣たちによるセッション記録については先端課題研究 16「human/non-human interface」のウェブサイト参照されたい(<https://www.soc.hit-u.ac.jp/~hnh/>)。

一見雑多に見えるセッション記録からは、それぞれの研究がなんらかの形で人間と非人間の接合点や「狭間」を探求するという点で繋がっていることがわかる。人文社会科学系の教員・院生が、自然科学や工学的知識を一回の講義で理解するのは決して容易なことではなく、議論が温まるまでに時間がかかることもしばしばあった。一方で、接合面、つまりインターフェイスという着眼点は共有されていたため、それが領域を超えた対話を可能にした。全くちぐはぐな質問と応答から始まる議論も、何かへ収束することなく——統一した全体を目指すことなく——煮え切らなさを抱えながらも問題発見へと繋がる契機となっていた。

煮え切らなさの背後にあるものとして、論理と倫理の関係について考えることができる。あらゆる議論はどれだけ論理的に構成されていたとしても、——ある論文を面白い、あるいは面白くない、良い悪いと感じながら読む時——そこには必ず倫理的なものが介在する。論理的なものや倫理的なものとの接着剤となるのは語り、あるいはストーリーではないか。ワークショップ「アフター・サイボーグ」は、言うまでもなくダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」を受けて企画されたものだが、ハラウェイの議論に通底してあるのは、まさに論理と倫理をつなぐ語りである。しかし、語りは様々な部分の接合面を包括する全体性とは異なる。語りは、従来の論理と倫理の関係を不安定にさせたり、つなぎ直したりする試みなのである。セッションで講師を務めた大澤博隆氏とグラント・ジュン・オオツキ氏に加え、田中雅一氏という三名の登壇者、そしてコメントーターの菅原和孝氏は、いずれもこの語り、あるいはストーリーと深く関わってきた研究者たちである。だが、それぞれの論理と倫理のつなぎ方は全く異なる。本ワークショップは、「サイボーグ宣言」が世に出た当時(1985年)存在しなかった様々なテクノロジーに囲まれて日常を生きる現代に、それぞれが目指す臨界、あるいは接合面から、改め

てサイボーグにアプローチする試みである。

以下に掲載するワークショップの記録は、当日の発表順に掲載している。前半では日本語版を掲載しているが、オオツキ氏の発表に関してはオリジナルの英語発表を日本語に訳したものである。後半の英語版については、オオツキ氏以外の二名の発表はオリジナルの日本語版を英訳したものである。事後的な加筆修正は最小限に留めたため、当日の議論の臨場感を味わってほしい。

最後に、登壇者の皆様、お越し頂いたオーディエンスの皆様、そして本ワークショップの開催にあたって様々にご支援いただきました皆様に、心より御礼を申し上げます。

編集担当：難波美芸

先端課題研究 16 リサーチアシスタント